論　文　ニダバ (*Nidaba*) 39(2010), 106-115

論理的文章における程度副詞について

―文体差と意味的用法の観点から比較を表す程度副詞を中心に―

渡　辺　史　央

本稿は、論理的な文章のなかで、論述文と論説文における程度副詞の現れ方について、文体差と意味用法の観点から検証および分析するものである。本稿で取り上げる程度副詞は、比較を表す副詞の中から「もっと」「さらに」「もっとも」「一番」である。また、程度副詞の中でも多数を占める程度が大きいことを表す副詞の中から「非常に」「とても」についても考察する。本稿では、論説文の類でもある新聞の社説における現れ方について見ていくことで、程度副詞の文体差というものについて考え、さらに、留学生（中国語母語話者）の書いた論述文から 1）文体差に関する誤用、2）意味用法に関する誤用の原因について考察を試みる。

1. 論述・論説文における程度副詞の位置づけおよび先行研究

副詞の中でも程度副詞は、「状態性の意味を持つ語にかかってその程度の度合いを限定する副詞」（『国語学大辞典』p.745）と定義されており、つまり、一言で言うと、「属性語に先行して、程度限定を行う副詞」と言える。拙稿（1997）では、程度副詞を「状態や性質などの属性を表す語に先行し、その程度の限定をする際、話し手の判断によって程度の段階を限定する働きを持つ副詞」とし、「程度」とは、あくまで何らかの判断基準によって度合いの尺度上、話し手（書き手）によって位置づけられるものであると考えた。[1]

本稿では、「論述・論説文」を、「あるテーマについて、客観的なデータや資料を根拠として、書き手の意見（結論）や主張が説得性をもって述べられている論理的文章」と定義し、大学で課される論文やレポート、新聞の社説はその代表的なものとして捉えておく。

程度副詞の分類については、近年、様々な先行研究があるが、その代表的なものとして、工藤（1983）、森山（1985）、渡辺実（1990）、佐野（1998）がある。[2] 渡辺実（1990）は、構文的特徴に基づく程度判断の仕方に着目し、程度副詞の二分類化（「発見系」と「比較系」）を行った。[3] 拙稿（1997）も、構文的特徴を基本とした分類を行った。本稿でも、それを踏まえ、程度副詞を典型的な比較構文に立つものと立たないものに分けて考える。つまり、程度の限定に際して、程度の度合いの位置づけが非相対的に行われるのか、ある特定のものとの比較から相対的に行われるのかといったことである。[4] 前者には二者間の

比較を表す「もっと」「さらに」「ずっと」や、三者以上での比較を表す「一番」「もっとも」が含まれ、後者には「とても」「非常に」「大変」などがその代表的なものである。

中国語の程度副詞について、日本語との対照研究をまとめた近年におけるもっとも実証的な先行研究として時衛国（2009）がある。時は、程度の決定は常に何かとの比較によってなされるものであり、その決定の仕方として、＜非特定的比較＞と＜特定的比較＞という用語を用いて説明している。時（2009:pp.38-40）は、＜非特定的比較＞は、いわば「事象の内容・傾向や人間の考え方などを大雑把に捉える、概括的比較」とし、「他との比較」という意味を含みつつ、あくまで相対的比較を行うもので、該当するものとして、日本語では「とても」「非常に」「少し」「きわめて」などを、中国語では「非常」（非常に）、「极」（きわめて）、「太」（あまりに）などを挙げている。それに対して＜特定比較＞とは、特定のものを比較の対象とし、程度限定を行うものであるとしている。拙稿（1997）で「比較性程度副詞」としたものはまさに時のいうところの＜特定比較＞を行う程度副詞と重なる。また、それに加えて今回取り上げる「もっとも」「一番」もこれに類別できる。なお、時は、中国語においては日本語の「一番」にあたる「最」「顶」、「もっと」に相当する「还」、「比較的」に相当する「比较」などを＜特定比較＞の程度副詞として挙げている。

2. 文体を意識した語彙選択

2-1 井上（2009）による論説文における語の適切性について

文体差に関する最近の先行研究に井上（2009）がある。井上は中級以上の留学生の作文にみられる話し言葉と書き言葉の混用の問題に着目し、論述文指導の基礎研究として、白書に現れる出現数の多寡を基準にして論説文における語の文体の適切性について検討している。それによると、程度副詞については、「わずか」「はるかに」「比較的」は論説文における語の文体の適切性が認められ、「かなり」についても白書 500 万語の中で 675 回、「結構」は 7 回出現していることから「けっこう」よりも論説文の語の文体としての適切性が高いことを指摘している。 さらに、井上は「一番」と「もっとも」については、その境界が不透明であると指摘しつつも、井上の行った結果における用例数を見ると、「一番」は 40 例、「もっとも」は 2123 例あり、書き言葉としての適切性は「もっとも」のほうが高いと言える。程度副詞について、井上（2009）をまとめると次のようになる。なお、A 群は論説文において文体の点から語の「適切性がない」、B 群は「適切性がある」語群とする。

A 群	たった、ずっと、わりと、ずいぶん、一番
B 群	わずかに、はるかに、比較的、かなり、もっとも

2-2　新聞の社説における程度副詞

社説は、社会や世界のできごとについて、書き手の意見や主張を論理的に述べ、説得性をもって読み手に訴える論説文である。本稿では、書き手による文章の文体差や使用語彙の偏りをなくすため、インターネット上に公開されている以下の6社の新聞の社説記事から無作為に計4ヶ月分を集め、程度が大きいことを表す語と比較を表す語の中から以下のものについて抽出してその出現回数について調べた。その結果は下表の通りである。

【収集した社説】

京都新聞(2ヶ月分)、神戸新聞（2005/1/21-1/31)、朝日新聞（2009/6/1-6/16）

読売新聞（2009/6/3-6/16)、日本経済新聞（2009/6/9-6/16)、東奥新聞（1ヶ月分）

【新聞社説に現れた程度副詞の出現回数】

程度副詞	出現回数	程度副詞	出現回数
とても	0	**ずっと**	2
非常に	1	**もっと**	22（5）
大変	2	**さらに**	34
きわめて	21	**より**	38（1）
かなり	8	**一番**	2
けっこう	0	**もっとも**	13
ずいぶん	0		

（　）は見出し語として出現した数

まず、類義語としての「とても」「非常に」「きわめて」については、「とても」は否定的表現「とても～できない」の用法として1例あったのみで程度表現としての用法は皆無であった。「非常に」については、1例のみの出現であり、「大変」については、「大変な努力」「大変な時代」といった名詞修飾する形容詞的用法としてのみ出現した。一方、「きわめて」は21例出現し、これらの類義語の中で、もっとも高い出現率を示した。このことから、これら3語の類義語の中では、「きわめて」が論説文の文体にもっとも適切な表現であることが理解できる。

また、類義語「かなり」「けっこう」「ずいぶん」については、「かなり」が8例現れ、「けっこう」と「ずいぶん」は1例も現れなかった。これらの出現回数からも、話し言葉としての要素が強い「とても」「けっこう」「ずいぶん」は論説文には不適切な表現であることが裏づけられる。

比較を表す程度副詞の類の中では、「もっと」は22例（そのうち見出し語として現れたのが5例)、「さらに」は34例、「より」は38例現れた。話し言葉としての要素が強い「ずっと」は2例のみであった。「もっと」と「さらに」は「累加性」という意味用法を共通して有するが、文体差という点では、「さらに」のほうが書き言葉としての要素が強い。し

かし、表を見ると「もっと」の出現率は比較的高いと言える。これについてはあとで詳しくみたい。

三者以上のあいだにおいて程度が最高であることを表す「一番」「もっとも」については、「一番」は 2 例、一方「もっとも」は 13 例であった。 このことからも、「もっとも」が論説文の文体に適切性があることがわかる。

3. 比較を表す程度副詞「もっと」「さらに」「一番」「もっとも」

次に、比較を表す「もっと」「さらに」「一番」「もっとも」について、意味機能の観点から分析する。「もっと」と「さらに」は常に二者の間において相対的に属性の程度の比較を行う程度副詞であり、そのほかにも「ずっと」「より」などがこれに相当する。また、「もっとも」「一番」については、三者以上において、その程度の度合いが最高度であることを表す表現である。まず、「もっと」と「さらに」について考えてみる。

3-1「もっと」と「さらに」の基本的用法

まず、「もっと」と「さらに」の意味用法の違いについて概観する。これらの語については、拙稿（1996)、拙稿（1997）において、比較性程度副詞の「ずっと」とともに、3 語の意味用法について比較分析を試みた。これらの語はある属性の程度の限定に際し、常に特定の対象との比較から程度の度合いを決定づけるもので、筆者が「比較性程度副詞」と呼称したものである。比較性程度副詞の構文的特徴として、「今日は昨日よりもっと/さらに寒い」といった典型的比較構文には現れ、「*今日はもっと/さらに寒い」といった属性述語文には特定の文脈なしには現れることがないことが挙げられる。これは、「今日はとても/かなり/比較的寒い」といった他の程度副詞がこの構文に現れることができるのとは趣を異にしている。[5] また、「累加性」とは、「現状の程度を＜＋領域＞と捉え、それを程度の度合いの尺度上、もう一段階高い位置にまで引き上げようとする」もので、「もっと」も「さらに」も同様に有する意味機能である。逆に、現状の程度を＜－領域＞のものとみなし、それに不満や不十分さを認識したところから、理想値にまで高めようとする、いわば＜－領域＞から＜＋領域＞への程度の引き上げの用法については「さらに」は有していない。たとえば、「もっと」が「もっと～てください」といった要求の表現に現れた場合がそれに相当する。2 者の特徴をまとめると以下のようになる。

副詞／意味機能（構文）	比較性 （今日は昨日より～寒い）	累加性＜＋＞→＜＋＋＞ （昨日も寒かったが、今日は～寒い）	理想値への引き上げ＜－＞→＜＋＞（～ゆっくり話してください）
もっと	○	○	○
さらに	○	○	×

3-2　新聞社説の「もっと」

「もっと」について、2章で抽出された新聞社説の実例をみる。

(1) 麻生太郎首相は、持論の安心社会を実現するためにも改革と成長の青写真を**もっと**（*さらに）明快に示すべきだ。［京都新聞　2009/6/11］

(2) なぜ**もっと**（*さらに）早く再鑑定を認めなかったのかも疑問が残る。

［京都新聞 2009/6/ 6］

(3) 40分程度の党首討論では不十分で、**もっと**（*さらに）時間を充てるべきだと考える。

［東奥新聞　2009/5/2］

(4) 奈良市の女児誘拐殺害事件で逮捕された男は、幼女への性犯罪歴を持つ常習者だった。過去の事件で、出所情報が警察に知らされていたら、事件は**もっと**（*さらに）早く解決したかもしれない。あるいは、事件そのものが起きなかったのかもしれない。

［神戸新聞　2005/1/26］

収集した社説データから抽出された「もっと」の例をみると、上に挙げた（1）～（4）のような例が大多数を占めている。ここでの「もっと」は現状への不満から、それを理想的な程度に近づけようとする意味合いをもつ前述した＜－領域＞から＜＋領域＞への程度の引き上げの意味機能を担うものであり、「さらに」に言い換えができない。たとえば、(3)は、「40分程度の党首討論では不十分で」という表現からも、書き手が現状への不満を持っていることがわかる。そして、＜時間の長さ＞の程度について、それ以上の時間をかけることが理想であり、その理想値まで引き上げることへの要求を意見として表出していると言える。また、新聞社説では、筆者の見解(意見）を示す文に多く現れており、「～すべきだ」「～たい」といった文末のモダリティ表現との共起が多数みられた。修飾語としては形容詞のほかに、「議論する」「解決する」「解明する」といった動詞、「必要だ」「要する」といった表現が多数生起している。

一方、「さらに」については以下に挙げるような累加用法が大多数であった。

(5)雇用・賃金情勢は個人消費に直結する。三月の失業率は4.8%、求人倍率は0.52と大きく悪化した。非正規労働者が増えて所得水準が低下した上、企業業績悪化で賃金やボーナスカットが**さらに**進む恐れもある。[京都新聞　2009/5/28]

(6)京都市では、5－6月が修学旅行のピークで、すでに5月以降、530校、約8万人のキャンセル・延期が出ているというから驚く。しかも、今後**さらに**増えるのは間違いない。[京都新聞　2009/5/23]

上記例の（6）は、旅行のキャンセルの現状について、＜多さ＞の程度が高いと認識しており、それが今後ますます程度が高くなることを意味している。つまり、累加の意味をもつ。これらはいずれも「もっと」に置き換え可能であるが、「もっと」を使用する例は一例もなかった。このことは、累加性といった共通の意味機能をもつ場合は、論説文には「もっと」よりも「さらに」の使用傾向が強いことを示唆している。

3-3　中国語母語話者の論述文にみられる「もっと」

次に、中国人留学生（大学学部１年生）が書いた論述文における「もっと」について考えてみたい。なお、＃マークは非文ではないが、論述文の表現としては不適切と判断されることを意味する。

（7）現在日本の情況により日本人の平均寿命が＃**もっと**増加すると予測される。

（8）ここで注目すべきことは過去 1950～1955 年度には日本の平均寿命があんまり高くなかったんです。でも 50 年が経って今は世界一になりました。つまり、過去に比べてみたら生活レベルが＃**もっと**高くなったということです。

（9）今も日本という国は裕福だが、今より＃**もっと**住みやすい国を作るために努力していると思います。

上の（7）～（9）はいずれも「累加性」つまり、現状の程度を＜＋領域＞と捉え、それをさらに程度の高い状態に押し上げようとする「もっと」の用法であり、これは「さらに」や「より」に言い換え可能である。文体差を考慮すると、論述文では「もっと」ではなく「さらに」または「より」を選択することが適切であり、これらの文は語彙選択の上で不適切であると言える。そのことによって、文全体が話し言葉的で主観的な印象を読み手に与えてしまう結果となっていると言える。

中国語との意味用法の比較を行った先行研究として大島（1998）、時（1999）（2009）がある。時（2009:p.203）は、文体差という点では、中国語の「更」は、書き言葉にも話し言葉にも使え、一方同じ比較を表す「还」は話し言葉でのみ用いられるくだけた表現であるとしている。また、意味用法においては、「更」「还」の両者とも「累加性」の働きをもつことは日本語の「もっと」「さらに」と共通していると指摘している。このことから考えると、留学生が日本語の「さらに（更に）」を中国語の「更」に該当させたと容易に推測できそうである。しかし、なぜ中国語母語話者が「もっと」を多用する傾向があるのか、日本語学習におけるこれら２語の扱い方、とくに、指導上の提出順や意味用法の提示方法などの影響も推察されるが、これについては今後の考察に待たねばならない。

3-4　三者以上の比較を表す副詞―「もっとも」と「一番」―

両者のうち、論理的文章における文体差を意識した語彙選択という点で考えると、より適切性があるのは「もっとも」である。拙稿（印刷中）における分析によって、留学生の論述文においてもっとも多かったのは、「もっとも」「一番」についての使用における語彙選択上の不適切さであった。以下にその例を挙げる。

（10）内閣府「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」によると、2005 年は、日本は高齢者の生活困窮度が＃**一番**低いことがわかった。

（11）殺人発生率からみると、アメリカが＃**一番**多く、6.3 ポイントに達している。

これらは、データを論拠としていずれも、「日本の高齢者の生活困窮度が最低であること」

「アメリカの殺人発生率が最高であること」が明確である。そこで、論述文では、文体差を意識して、「もっとも」を選ぶべきところを、「一番」を使用したことにより、文全体として論説文としての論調を欠くと考える。

日本語の「もっとも」「一番」と中国語の「最」「顶」の意味用法の違いについて、時(2009)は、中国語の「最」「顶」、日本語の「もっとも」「一番」は、いずれも「トップに立つ事象を捉え、その事象を最上位にランクする」（p.184）という意味用法上の共通点を持ち、さらに、中国語の「最」「顶」、日本語の「もっとも」については、程度性を相対化することも絶対化することもできるとしている。たとえば、以下の用例で考えてみよう。

（12）日本は世界で**もっとも**経済発展を遂げた国の一つである。

上記文では、「日本」という国が経済ランキングにおいて第一位の国とそれに相当するトップグループに属するものも修飾することができる。時はこのことについて、「程度性を相対化する」ことだとし、中国語の「最」「顶」も同様の機能を所有すると指摘している。一方、日本語の「一番」については、トップグループの中の最高位のものにしか焦点を当てることができず、その程度性は絶対的なものであり、一つに限定されてしまうと述べている。たとえば、留学生の作文でよくみられる以下のような文で考えてみる。

（13）日本は世界で**一番**経済発展した国である。

この文は、「日本が世界で他のどの先進国よりもトップの順位で経済が発展している」というのではなく、「経済発展を遂げたいくつかの国があり、日本もその中の一つである」という意味を表現として意図していたと思われるが、「一番」を用いることでそれを適切に伝えられていない。「一番」という程度副詞は、時（2009）の指摘するまさに「絶対的」にトップであるという最高位を示すものであり、比較対象となる多数の個体の中から唯一選ばれたものでなければならないわけであるが、その意味用法を理解せず、「最高グループ」という意味合いで「一番」という副詞を使用する傾向が日本語学習者にはしばしば確認される。

また、文体差ということに関して言えば、中国語母語話者が副詞の選択において文体差をさほど意識せず、母語に存在する漢語を使用する傾向がみられる。石黒（2004）は、国内と海外（中国）で学習する上級レベルの学習者の作文レポートを副詞の使用の観点から量的分析を行っている。それによると、日本語の漢語副詞が和語副詞と比べて使用率が高いことを指摘し、「もっとも」についてはとくに海外で日本語を学ぶ中国語母語話者にとっては馴染みがなく使いにくい可能性があると述べている。[6] さらに、石黒は「もっとも」と「一番」のように、漢語副詞が和語漢語よりも話し言葉的であるケースが多いことにも触れ、その理由として漢語副詞の多くが「曖昧な認識、思いこみに基づく判断などを含意し、書き言葉としての厳密さに欠く点がある」と指摘している点は非常に興味深い。

4．程度が大きいことを表す副詞―「非常に」「とても」「きわめて」―

最後に、程度が大きいことを表す程度副詞について考えてみたい。今回は紙幅の関係上、詳細を別稿に譲るとし、本稿では留学生の例文を挙げて、いくつかの問題点を指摘するにとどめておく。

「非常に」「とても」「きわめて」を文体差という観点から比較すると、もっとも論理的文章に適しているのは「きわめて」であり、「とても」はもっともくだけた表現である。また、一般的に「非常に」は「とても」よりも書き言葉的な表現であると言える。拙稿（印刷中）では、日本人学生より留学生のほうが「とても」より「非常に」の選択率が高いという結果が出た。このことは中国語にほぼ同じ意味をもつ「非常」という程度副詞が存在することに関係があると思われる。「非常に」「とても」は、比較を表す程度副詞のように比較の基準の存在が明示されないことから、論述・論説文で使用するには、あくまで客観性と説得性をともなった形での使用が条件となってくる。つまり、程度限定に際してその程度の度合いが一般的な尺度（通説・社会的常識）などから明らかであるか、あるいは程度限定の判断基準が具体的データや資料などによって文脈上に示されていることが必要条件となるのである。以下は、留学生の論述文からの例である。

（14）日本におけるいじめの問題は**非常に**深刻化している。

（15）図１は世界の主要国の名目＆一人当たりＧＤＰを示したものである。日本国民一人当たりのＧＤＰは 31277 ドルであり、この図になる国の第４位となっている。従って、日本の経済力は**非常に**優れていることが明らかである。これは日本人は会社に力を尽くしたためであると考えられる。

（16）そして『日本経済新聞』によると、日本の経済成長率が**非常に**悪く、マクロ経済が低迷していることが明らかである。

上記の（14）の例は「日本におけるいじめの＜深刻さ＞」の程度が程度の尺度上高い位置に位置づけられていることは、社会通念的に言えることであり、とくに程度限定の判断基準を文脈上に示さなくても説得性をもった文として認められる。（15）（16）は、＜経済力＞および＜経済の悪さ＞について程度限定を行っている。（15）の例は、点線部の具体的なデータ部分によって程度限定の判断基準が文脈上に示されており、程度限定は客観性を伴っていると言える。一方、（16）は文中に「非常に悪い」と言える根拠となるデータ（この場合は新聞からの引用内容）が具体的に示されていないため、書き手の主観性を感じさせ、読み手への説得力に欠けると言える。

5．まとめ

以上、論述文と社説を題材に、論理的文章における程度副詞について、程度が高いことを表す表現と比較を表す表現を取り上げ、とくに比較を表す「もっと」「さらに」「一番」「もっとも」について文体差と意味機能の観点から考察を行った。これにより、文体差と

いうことについて、新聞社説における出現率から、論理的文章では「さらに」「もっとも」が適切性が高いことが裏づけられた。また、「もっと」が論説文で現れる場合は、現状の程度に不満を感じ、それを理想値にまで引き上げようとする＜属性＞程度の＜－領域＞→＜＋領域＞への引き上げの用法にほぼ限られていたことが理解された。また、日本語学習者（大学の学部留学生）の中国語母語話者の書いた論述文で「一番」を好む傾向が強いことについて、中国語母語話者は、文体差の程度にかかわらず漢語副詞を用いる傾向があることに加え、日本語の「一番」が「最」「頂」「もっとも」が有する「程度の相対化」という意味機能を有しておらず、それにより絶対的トップを表す「一番」の使い方が定着しにくいことが確認された。

今後は、今回考察が不十分であった程度が大きいことを表す「非常に」「とても」「きわめて」においても、論理的文章における文体差と意味機能の観点からの考察を深めるとともに、程度副詞の分析対象をさらに広げ比較検討していきたいと思う。また、このような研究成果を、将来的には留学生への論文指導の実践での貢献につなげていきたいと考えている。

【注】

[1] 詳しくは、渡辺（1997）を参照のこと。

[2]工藤（1983）は、程度副詞の分類についての先駆的な研究であり、その構文的特徴から体系化を試みている。「他のモノゴトとの比較性が強いもの」のなかに、「もっとも」「一番」をはじめ、「もっと」「ずっと」「一層」などを挙げている。森山（1985）では、程度限定の対象となる動詞の意味によって、量的なものか持続時間かなど、その表出できる事項が異なるといった点に着目し、存在文に共起できるかどうかといった観点から、共起可能なものを「量的程度副詞」と名称し、存在文に現れ得ない程度副詞のうち、量的概念を内包しないものを「純粋程度副詞」と呼称している。佐野（1998）は、主体変化動詞との共起関係を分析し、程度副詞を次の２分類している。なお、時（2009：pp27-37）において、近年の程度副詞の研究についての概観と見解がある。

[3] さらに、渡辺実(1990)は、「評価性」という観点から「非評価系」に「とても類」「もっと類」、「評価系」には「結構類」「多少類」に分類している。

[4] たとえば、「20畳」の太郎の部屋を見て、「太郎の部屋は次郎の部屋よりずっと広い」といえば、「太郎の部屋」について、「(6畳の）次郎の部屋」との比較から相対的に程度の限定がなされていると言える。それに対し、「20畳」の太郎の部屋を見て、「太郎の部屋はとても広い」と言えば、程度の度合いの位置づけにおいてとくに比較の対象を有せず、一般的尺度か話し手自身の見解を基準として属性程度の尺度上における位置づけがなされていると言える。

[5]その基準となる点から程度の度合いが低い領域を＜属性の度合い＞の＜－領域＞、基準点より高い領域を＜＋領域＞とする。

[6] 石黒（2004）は、実質的な意味を担う名詞や動詞と異なり、副詞や接続詞などの文法的な性格の強い文体差における区別は、日本語学習者にとって習得が困難であることを指摘している。

【参考文献】
石黒圭（2004）「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」，『一橋大学留学生センター紀要 7 号』，一橋大学
井上次夫（2009）「論説文における語の文体の適切性について」，『日本語教育 141 号』、日本語教育学会
大島潤子（1998）「日本語と中国語の比較を表す程度副詞をめぐって―「もっと」と“更”―」，『国文目白 37 号』，日本女子大学
工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」，渡辺実編『副用語の研究』，明治書院
佐野由紀子（1998）「程度副詞と主体変化動詞との共起」，『日本語科学第 3 号』，国書刊行会
時衛国（1999）「中国語と日本語における程度副詞の対照研究―「更」「还」と＜もっと＞＜さらに＞―」，『コミュニケーション科学 10 号』，東京経済大学コミュニケーション学会
時衛国（2009）『中国語と日本語における程度副詞の対照研究』，風間書房
森田良行（2008）『動詞・形容詞・副詞の事典』，東京堂出版
森山卓郎（1985）「『量的程度副詞』と『純粋程度副詞』」，『国文学会誌第 20 号』，京都教育大学
渡辺史央（1996）「比較性程度副詞『ずっと』『さらに』『もっと』の一考察―比較の基準と程度の認識をめぐって―」，神戸市外国語大学大学院（修士論文），神戸市外国語大学大学院外国語学研究科
渡辺史央（1997）「『ずっともっと』をめぐって―『比較性』の意味機能の観点から」，『日本語・日本文化 23 号』，大阪外国語大学留学生日本語教育センター
渡辺史央（印刷中）「論述文に現れた副詞の分析―留学生と日本人学生の作文より―」，『京都産業大学論集　人文学系列　第 41 号』，京都産業大学
渡辺実（1990）「程度副詞の体系」，『国文論集 23 号』，上智大学国文学会
国語学会編　『国語学大辞典』，東京堂出版，1980 年